

◆モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第41番 変ホ長調 K.481

モーツァルトの手になる初期のヴァイオリン・ソナタは、いずれも「ヴァイオリンの伴奏を持つピアノ・ソナタ」として書かれています。つまり、ヴァイオリンが添え物程度の役割を与えられているにすぎず、習作的な性格が強いことから、現在ではほとんど取り上げられません。

しかし、1778年以降のソナタは徐々にヴァイオリンの地位が引き上げられて、ピアノと対等の地位を獲得するに至ります。そして、1784年の変ロ長調 K.454では、ヴァイオリンの役割がこれまでになく高められた完全な二重奏ソナタが実現され、これに続く1785年の変ホ長調 K.481、さらに2年後の1787年には最後の頂点ともいべきイ長調 K.525が書かれています。

さてこの度のヴァイオリン・ソナタ第41番変ホ長調 K.481はウィーンで書かれ、1785年12月12日完成の記録があります。第1楽章はモルト・アレグロ、明るい晴れやかさの中に力強いものも込められていて、展開部では<ジュピター>交響曲に出るフーガ主題が用いられています。第2楽章はアダージョ、ロンドの形で書かれていて、抒情性の深さに際立ったものがあります。第3楽章はアレグレット、主題と6つの変奏から成っています。ヴァイオリンが美しい歌を奏でる第1変奏、ピアノが主体となった第2、第3変奏、二つの楽器が織り成す華麗な変奏が続き、第6変奏で大きくフィナーレを盛り上げて終わります。

◆ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ第7番 ハ短調 Op.30-2

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第7番ハ短調作品30-2は、1802年頃に作曲されたと推定されます。第6番、第8番とともにロシア皇帝アレクサンドル1世に献呈されており、この経緯から3曲とも通称「アレキサンダー・ソナタ」とも呼ばれています。

作曲推定年である1802年は10月に「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれるなど、ベートーヴェンにとっては追い込まれた年ではありましたが、その一方で「英雄」の作曲が始められるなど、いわゆる初期から中期への転換に差し掛かる時期でもありました。第7番は、第6番のイ長調、第8番のト長調のように明朗な調とは違って、いわゆる厳しい調となるハ短調で書かれています。このOp.30の3曲から後のソナタはモーツァルトの影響を脱し、独自の境地を築くこととなっていきます。

第1楽章の冒頭では、3拍の後に16分音符4つの特徴的な主題がピアノによって提示され、繰り返し後ヴァイオリンが主題を奏でます。冒頭主題の繰り返しは、劇的な効果をあげることとなっています。第2主題は、変ホ長調の行進曲風のものとなります。展開部は、変ホ長調・ロ長調・ト長調が第1主題、変イ長調が第2主題を受け持って、古典派ソナタ形式の定義どおりの展開をしていきます。再現部前に変イ長調のコラール風の部分があるのは注目されることです。

第2楽章は、作者のハ短調の作品によく中間楽章として採用される調となっています。悲愴ソナタの中間楽章をしのぐ旋律美が現れます。ピアノで第一主題が奏でられ、ヴァイオリンが繰り返しを行い、途中変イ短調の優雅なアルペジオがピアノと掛け合いをすることが魅力的です。曲終わりには、急速なハ長調の音階が交互に現れ、歌謡風にするあまり冗長になって観客が退屈しないようにする工夫が見られます。

第3楽章は、付点リズムの主題がピアノで現れ、ヴァイオリンが後を追います。中間部はハ長調のままでピアノの三連符が印象的となっています。

第4楽章の冒頭に、たたきつけるようなピアノの主題が現れ、ヴァイオリンがそれを加勢します。その後、第一主題と活気ある別の主題とが現れてきます。終末には、プレストで豪快にソナタ全楽章の締めくくりが見られることとなります。

◆サン＝サーンス：ヴァイオリン・ソナタ 1 番 ニ短調 O.P. 7 5

カミーユ・サン＝サーンスが残した功績は、その全貌を見渡しにくいほど大きいものがあります。彼は長命であるとともに、作曲家としてあらゆるジャンルに多くの作品を残したばかりか、それ以外でも多才でした。ピアニストであり、オルガニストであり、音楽教育者であり、詩集や戯曲を書き、哲学・天文学・自然科学・考古学に関する論文も発表しています。

ところが、あまりに長命であったからか、時代が彼をはるかに追い越して行った感があり、彼の作風はどうしても当時の時代遅れのレッテルを貼られやすかったのです。しかし、今彼の音楽を聴くに、彼が同時代と置いていた距離は気にならないどころか、その中庸にして多彩な作風は、むしろ演奏者のセンスひとつで新たな魅力を見せてくれるものとなります。

その美質がよくあらわれた作品のひとつが、ヴァイオリン・ソナタ第 1 番（1885 年）です。全体は 2 つの楽章からなりますが、実際はソナタで一般的な 4 楽章構成をとっています。これは翌年に書かれた交響曲第 3 番《オルガンつき》の楽曲構成と共通しています。

第 1 楽章は、表情豊かな「アレグロ・アダージョ（激して）」に続いて、そのまま緩徐楽章にあたる「アダージョ」となります。第 2 楽章も、前半のスケルツォにあたる「アルグレット・モデラート」から、切れ目なく最終部分の「アレグロ・モルト」となります。均整のとれた構築としなやかなロマンがよく溶け合った音の世界、情感豊かな素材を明晰な視界へ広げてゆくさまが見事であるといえます。

◆サン＝サーンス／イザイ編曲：ワルツ形式によるカプリース

ベルギーのヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイは、名演奏者にして作曲家というヴィルトゥオーゾの系譜を引き継ぎ、多彩な技巧と豊かで自由な表現で古いスタイルを越えて、後世にも大きな影響を残しました。彼は同時代のフランスの作曲家たちと親交も深く、サン＝サーンスをはじめフランク、フォーレ、ショーソンといった人たちの作品を多く初演し、絶大な信頼を寄せられていました。

1900 年頃の作品といわれるこの曲は、サン＝サーンスがピアノのために書いた練習曲のうち、まず最初にまとめられた<6 つの練習曲—作品 52 (1877 年)>から、第 6 曲ワルツ形式の練習曲を基にヴァイオリンとピアノのために編み直したものです。ヴァイオリンの華麗な技巧を魅せて、心躍らせる作品となっています。